



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成14年
12月号

毎月23日発行
通巻388号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成14年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



10月28日 身延山山頂付近より望む富士山 石田昌男さん撮影 (一泊文化行事報告・5頁)

再録

大倭はかく歩み来たれり(三)

先月号(一)(二)に続く。

昭和25年1月4日『大倭』第11号より

大倭教は立つ

神の厳正公平なる裁きは、日本から武器を去らしめた。そして敗戦という神の大慈悲の利剣は、日本国の頭に打ち下ろされたのである。ここに神が産み給う神慮は、神国平和日本であった。

二十世紀の世界は武力暴力をさげ宗教を以って各国が立ち、そこに世界民族に共通せる宗教心を以って相互扶助の形に於いて共存共栄の実を挙げ神恩に報いなければならぬ。

犯した罪はいつかは神から禊がれる日がある。罪浅ければ神罰は早く現れ、罪深ければその応報は遅くなる。だが神の裁きは遅ければ遅いだけ峻烈の度を増すばかりである。

先ず日本は苦の世界から救われた。あたかもそれは冬の日、水に溺れて今や死なんとした刹那、救い出された形にある。どうか命だけは助けられたところである。だが入水の罪は、救出の瞬間からある期間、禊がれ苦しまねばならぬ。これが即ち日本が世界各国に魁^{きざし}で、宗教立国の国是を以って健全に立ち上がる日までの茨の道に等しいのである。

秋になれば松茸が出る。しかしてこの時季には無数の毒茸も出る。神機一度ここに動けば、形のみ同じ宗教教団が林立する。我が日本には古くより神道があり仏教があり、近くはキリスト教もある。現今、日本領土に存在するどの家庭にあつても、そのいづれかに属しているの

あるから、日本人一人一人が必ず宗教心の持ち主であるべきではあるが、それがなぜか社会の表面に現れる面が誠に艶なく、敗戦後の社会情勢は全く道義地に落ち人心兢々として心の安定を握まないう、まさに混乱せる無宗教国家にまで転落したと云える。

現今、社会人の嘲笑罵倒の頂点に立っている種々雑多な、いわゆる新興宗教が乱立したことも一面は既成宗教の老末期を物語ると同時に、時代が新宗教を要望していることにもなる。これ即ち幽界に於ける神意が、顕界にこうした動きを見せてきたものである。幾万の魚の卵が完全に魚となるものは少く、又幾百と生まれる蜘蛛の子も成育するものはわずか一、二匹と聞く。だがこの多くの子の生まれるのも、その中の一匹を残すべく何かの働き、力となっているはずである。

新しき宗教は生まれるわけがない。しかし、神が選び給う時代即応の新しい聖者としての宗教家の出現することは必然的である。宗教に志す者、「我こそは世界の救世主だ」と叫んで立つべき時である。これ等やがては神の裁きによつて、その真の使命者ただ一人を生み残す役割だけを演じて自ずから消滅していく運命に置かれているものであるからだ。

我が大倭教、日聖教祖も昭和二十一年年頭、神示によつて雄々しくもこの暗暗たる世の光明として悲壮な決意のもとに振るい立たれたのである。同年七月十七日、宗教法人大倭教として法的手続きを完了し、神示に基づく宗教活動はいよいよこれより積極的に開始することになったのである。日聖教祖は常に世界の宗教統一を叫ばれていた。しかしその統一の真意義は、一宗教の名を以つて一切を霸道的に折伏統一する意味ではなく、常に教祖が口にさる大倭哲理たる差別即調和、

無統制即統制の理念に立脚しているもので、世界宗教として普遍妥当性を認め得るものは、大宇宙の真理をよく把握しそこから生まれてくる大智によつて集積せる、絶対平等の大慈悲心即ち宗教心

風ぐるま

日向三代の神々——神武以前

博多にて 矢部 顕

霧島山（鹿児島、宮崎の県境に位置する）の高千穂峰に登ったことは、以前書かせていただいた。（平成12年3月号）

もう一つ高千穂がある。宮崎県西臼杵郡高千穂町。大分県の祖母山や熊本県阿蘇に近い宮崎県北部にあつて、高千穂峽で有名なところ。古くから天孫降臨の場所はどちらなのか論争が絶えない。霧島のそれはきわだつて美しい威風堂々たる山だが、この「くじふる峰」といわれる二上山は周辺の山との区別がつきにくい。この地には広い田園地帯はみられない。天孫族が稲作技術をもつてきた渡来人とするなら、ここは少し狭い土地ではないか。

高千穂神社の宮司さんと境内で偶然出会い、立ち話しのなかでそのことを訊ねてみた。「お米だけで暮らしていたのではないでしょう。山の幸、川の幸、海の幸を得て生活するのは今もそうではないですか。」

稲作が始まる以前の縄文時代は、あるいはそれ以降も、いや、つい最近まで、里山が食料供給の重要な位置をしめていたことを忘れていた。水の豊かなこの地は棚田が美しい風景をかもしたしている。平野部に水田をつくるには、灌漑などの土木技術、農耕具などの製鉄技術の発達をまたなければならなかったのかもしれない。古色あふれるこの神社は高千穂皇神（二二ギノ

でなければならぬ。各々が絶対と信ずる所依（※よりどころ）の教理を体得して、同じ宗教心をもて同じ宗教的理想に向かって精進の歩調を揃えた時が、即ち宗教統一の暁と云えるのである。

ミコトらいわゆる「日向三代の神々」を祀る格式の高い社である。「どちらからお越しですか？」と宮司さん。

「仕事で博多にいますが、大和です。奈良市の富雄あたりですから、神武に征服されたナガスネヒコ系のほうです」。ちよつと冗談めいて答えたら「いやいや、あなたのDNAには神武もはいっています」ときりかえされた。「そうですね、融和の精神が神道のいいところですね」と応えて笑いあつた。

いくつかの著作をもつていらつしやる学識の豊かな宮司さんだった。この高千穂には、少し離れたところに天岩戸神社がある。なんと御神体は天岩戸で、狭い溪谷をはさんで対岸の洞窟（天岩戸）を拝む。

イザナキの子・スサノオが母神（イザナミ）に会いたくて乱暴狼藉をはたらき、イザナミの住む黄泉の国を訪ねる前に、姉神（アマテラス）に会おうとして姉神のおさめる空の国に行く。

*姉神もさすがにおそろしくなり、石の洞窟にかくれ、出てこなくなった。空の国はまっくらになった。空の神々はスサノオを追はらうとした。

いわゆる「アマテラスの天岩戸隠れ」である。空の国（高天原）にあるはずの天岩戸がここにあってはないか。そのうえ500mほど川上に

「天安河原」までである。アマテラスが天岩戸に隠れたとき、神々が対策を協議したという、いわゆる「八百万神が神集い神議り」したところ。天孫降臨したこの地に、高天原にあるべきものがあるのはどうしてなのか。祖先を祀るためによく似た場所を再現したものか、あるいはここが高天原そのもののなかか。

高天原（天津国）がことしたら中津国は中国地方だという説が成り立つ。ふつう豊葦原の中津国とは高天原に対して地上の国のことをいう。

この神社の庭には招霊の木が神木として生えていた。アメノウズメは天岩戸の前でこの木の実を手にして踊ったというもの。神楽鈴のもとになったという。

ここで思い出した。アマテラス（天照大御神）は卑弥呼であるという説がある。248年に卑弥呼が亡くなったことは「魏志倭人伝」の研究者が一致して認めるところらしい。この年9月5日に皆既日食があったことが天文学でわかっている。アマテラスはその名がしめすように太陽神で、お隠れになって世の中が真っ暗になってしまったという物語は、卑弥呼の死と皆既日食が重なった歴

史が神話化したものという説である。
この高千穂には、ほかにも、くじふる峰のくじふる神社とか高天原遥拝地とか、天孫降臨にまつわるさまざまな場所があつて、おおいに混乱させてくれる神の里である。

高千穂に降臨した天孫族の二ニギノミコト（日向第一代）が、この土着の神であるオオヤマツミノカミの娘・コノハナサクヤヒメと出会ったのはどこか。古事記によれば「笠沙のみさき」ということだが、それは何処なのだろうか。

*「ホオリ。わたしたちの母神がコノハナサクヤヒメだということを知ってるね」

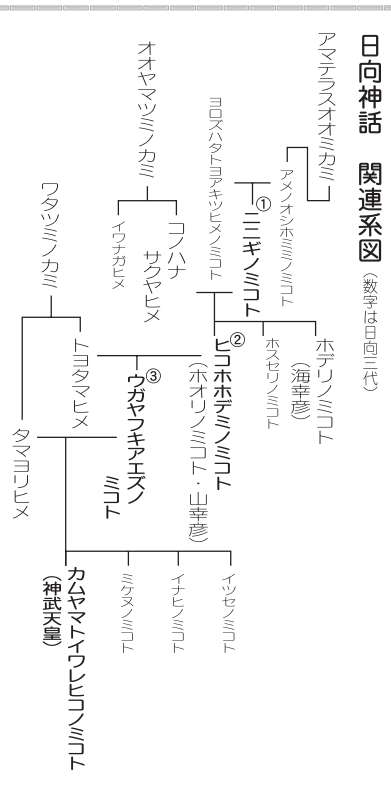
「知っています。兄さんきれいな方だったのでしょ」

「名前からして、こすえにさく春の花だものね」

「父神はあの岬をまわったところで、母神に会われたそうなの。ホデリのゆびさすまうに、くだける波く、それにも負けないくらい白い砂浜があります。」

宮崎県西都市にコノハナサクヤヒメを祀る都萬神社がある。都萬は妻か。コノハナサクヤヒメの宮跡といわれている地。

この近くには、水波みにきたヒメと出会った場所という、その名もうつくしい響きの逢初川と名



樹齢1200年を超す楠の巨木が生えていて、伝承の歴史が今にいきづいてい

のみさきはここのなか。あるいはこの東方の海辺なのだろうか。
この伝承地のすぐ西、南北3km東西1.5kmぐら

南方系の文化を感じさせるものだ。

青島はびろう樹などの熱帯・亜熱帯性の木々が生い茂り、南方の異国にきた感じのする神の島。ホオリは訪れた海の宮で3年間過ごしたのち、ワダツミ（海）の神に釣り針をみつけてもらって突然帰ってくる。慌てて迎えに出たため、着物を着る暇もなかったと言いつつ裸の祀りが、ここ青島神社（宮崎市）では今に続いている。

「わだつみのいるこの宮」で、ホオリと契りを交わし身もつたワダツミの神の娘・トヨタマヒメは、ホオリの国で出産するために、後を追いつたの鶴戸神宮（日南市）にやってきて、ウガヤフキアエズノミコトを生む。

黒潮の怒涛くだける日向灘に直面して、神秘的かつ巨大な洞窟のなかに鶴戸神宮が鎮座する。ここが産殿。しかし覗いてはいけないといわれたタプーをホオリは侵し、出産時に出身地方を象徴していると思われる姿（ワニ）になったのを見られてしまったトヨタマヒメは、恥ずかしさのあまり皇子を残して「海の宮」に帰ってしまう。

皇子のために乳房を置いていったという乳房岩がある。洞窟にふたつの乳房に似た岩が垂れ下がっていて、そこから落ちる雫でアメを練って売っていた。このアメを子どもにも与えるとよく育つと書いてあったので、孫のために買った。

海を見下ろすと亀岩がある。トヨタマヒメが海の宮から乗ってきた海亀がそのまま岩になってしまったというもの。帰るときは何に乗って帰ったのだろう。

日向第三代のウガヤフキアエズは、養育係りとして赴いたトヨタマヒメの妹・タマヨリヒメとのちに結婚し、4人の皇子を生む。第4子がカムヤマトイワレヒコ、すなわち人皇第一代の神武天皇である。のちに神武東征といわれる遠い大和への

旅にでる。市街地とは思えないほどのうっそうとした森に囲まれて鎮座する宮崎神宮（宮崎市）に神武天皇は祀られている。

では、「わだつみのいるこの宮（海の宮）」は何処にあるのか？ はるか南の海の底なのか。竜宮のイメージと重なり合う。物語としては海のかなた、海の中にあつたほうがいい。

薩摩半島の南端、これほど完璧な円錐形の山は他に例をみない美しい山で、薩摩富士の異名がある開聞岳（992m）。その麓に薩摩国一の宮である開聞神社（鹿児島県開聞町）があり、近くに「玉の井」という小さな井戸がある。

ここがホオリとトヨタマヒメが出会った場所という言い伝えがあるところ。井戸の水を汲みにきたトヨタマヒメが水に映ったホオリの姿に一目惚れする情景は、久留米が生んだ天折の天才・青木繁の絵「わだつみのいるこの宮」（石橋美術館蔵）に描かれている。（下段の絵）

この地方は先住民族ハヤトの地。ハヤトは海の民でもある。単に漁労のみならず南方交易で富をたくわえ、その宮は豪華絢爛であつたにちがいない。その象徴が「いろこ（魚鱗のごとく輝いていた）の宮」ではないか。ふと思う、「開聞」は「海門」なのだ。ここは南方に広がる海の世界の出入り口であつたことは確かだろう。

少し北の、特攻隊基地があつたことで知られる知覧町には豊玉姫神社もある。

ホオリとトヨタマヒメの物語も、二二ギノミコトとコノハナサクヤヒメと同じく、異民族間の婚姻の象徴と考えられる。

大隈国一の宮・鹿児島神宮（鹿児島県隼人町）もホオリ（ヒコホホデミノミコト）とトヨタマヒ



メを祀る。お参りして帰ってから気がついたのだが、由緒記によれば御神宝に「潮満珠潮干珠」があると記されている。ワダツミの神（海の王）がホオリにプレゼントしたものではないか！

*「陸にすむもの、海にすむもの、それぞれにきまつたさだめがあります。お別れのとぎがきたようです」
そう言つて、大きな玉石をふたつとりだしました。

「これはシオミツタマとシオフルタマ。こちらの玉をひたいにあてると、そこらじゅう水ひたしになります。もうひとつの玉をあてると、水はたちまちひいてしまします。これをさしあげましょう」

そして、ここには単人舞を伝える人がいる。この玉によって溺れかかったホデリ（海幸彦）のさまが舞いになったといわれるもの。玉は水を支配することのできる呪術的な力をもっている。

*ところで、トヨタマヒメのさびしさもつけくわえておかなければなりません。あるときホオリのところに、わだつみのいるこのみやからこんな歌がときました。

青島神社にトヨタマヒメの歌碑が建っている。

「赤玉は 緒さえ光れど 白玉の 君がよそひし 貴くありけり」

*はじめにお会いしたとき、あなたはあの火の色をした玉を首にかかけていらして、それを通してひもさえも光かがやくようでした。けれども、わたしの国の白い真珠を身につけられたときは、それにもましてけだかく、すてきでしたわ、というのですね。

でも、だれが手紙をはこんだのでしょうか。サメでしょうか。それとも海力マでしょうか。

*印はラホ・ライフラー『国生』の絵本より

大倭会第272回

平成14年10月27～28日

一泊文化行事報告

～富士山を拝し日蓮を訪ねて～



▲ 同じインターで (10/27 青山元子さん写)



▲ 東名高速上郷インターで (10/27 矢追房子さん写)

▼ 宴会の演し物「かぐや姫」(10/27 石田昌男さん写)



▲ 身延山山上より望む七面山 (10/28 中村勝彦さん写)



▼ 富士山本宮浅間大社で (10/28 岸田哲さん写)



▲ 日蓮上人の御草庵跡 (10/28 中村勝彦さん写)



▼ 湧玉池 (10/28 湯浅晴子さん写)



▲ 身延川 (10/27 矢追房子さん写)



時と機からくりの旅

あじさい色 杉本順

私にとつて今回の旅の始まりは10月13日、禊会の勉強会からである。この日、勉強会終了直前、「二チレン オオヤマトタカマノハラデ スベテ キイテオッタ」「ソノトキワ ミノブデ マツテ オル」とのお言葉があったからだ。

10月17日朝、床の中で「私達がバスで気楽に身延山に行くような事で、鎌倉から歩いてお山に行かれた日蓮上人さんのお心が分かるのだろうか？」と自問する。聞いておられたかの様に日蓮上人が「ソー オモッテモラウダケデ ココロヤスラグ」と言われた。今日と比べながら当時に思いをはせるだけでも、それがお慰めになるものと教えて頂いた。

10月27日、秋の一泊文化行事当日の朝である。邑の諸霊人に出発の挨拶に行つた。奥津斎庭では初めて、龍王さんから「トモニユクゾ」と言われて本当に驚いた。次いで法主様の奥津城に参る。「ゴクロウ ワレモ トモニマイル」とのことであつたが、龍王さんのお言葉に私が怪訝な気持ちになつたことを察して、疑うことのないようにとさとされた。この時、一陣の風が強く吹いた。

この日の朝のご挨拶では日蓮さんは「アスノアサニ ウツシヨノ ミナフマツ」とのこと。身延山へは28日にお訪ねする予定だからであろう。

前もつて身延山、久遠寺の名の由来などを調べておいたせいだろうか、拝殿にある大倭神宮の神集う実相のお写真に挨拶をしていたら、「コレゾクオンノ ホンブツノ ジツソウ」（中央の金色の相）と教えて下さつた。

挨拶する霊界人は皆々、一言ずつ声をかけてこられ、ずいぶん賑やかなひとときであつた。

しまいには私の母までが「ワタシモ ツレテイ ッテ モラエルノデスネ」と言つてきた。法華経を丸暗記していただけの母であつたが、これも親孝行の一つだと自己満足した。

8時17分、参加者を確認してバスは出発となる。バスは運転手さんのおかげで安全かつ快調。

「日頃精進の良い方なら、この辺りから富士山が見えるはず」とのガイドさんの声に、みんなが窓に目をやりはじめた。「あつ、富士山や！」の誰かの声。すかさずガイドさんから「この程度で喜んでいては、もつときれいな富士山が見える頃にはくたびれますヨ」とアドバイス。東名高速道路をはずれて、身延に向かう国道に入るまで、ガイドさんの言う通りだつた。

この夜お世話になる下部ホテルに近づいた頃、何の脈絡もなく「クニイ ミチユキ」と心に浮かんできた。直感的に「八紘会」時代の法主様の友人で武術家の国井道之氏を思い出した。そう思つた瞬間、続いて「タケダ シンゲン」が出てこられた。武田信玄が「今夜の宴席に同席させてほしい」と言つてこられた。私は驚いたまま、「どうぞ」という気持でお答えしておいた。

バスは細い道を上手に走つて無事、ホテルに着。関東組や新幹線組も、先にホテルに入つておられた。車中で部屋割り表をもらつていたのでまずは各自思い思いに部屋に入る。

「今夜のご宴会は風林火山（武田信玄の旗印）の間でございます」と、案内係さんの声。おやまあ、こういうことだつたのかと納得した。法主様が霊界の武田信玄と一つになつた国井氏に、古武術の技を見せてもらったことがあるという話を伺つたことがある（『やわらぎの黙示』169頁）。

夜は恒例の大宴会。顕幽一つになつて底ぬけの笑いの後、私は関東から参加された皆さん等と11

時頃まで色々話し合つた。

10月28日の朝になつた。今日も天気は良好。さあよいよ身延山に参る。寒くなりそうと厚着をして出発したが暖かい一日を用意して頂いた。

「一大事の因縁——日蓮をめぐる」（『やわらぎの黙示』99頁）に出ている三門を横目にバスで通過。「ドンツクドンドン、ドンツクドンドン」、自分の家の子供の頃を思い出させてくれる団扇太鼓のなつかしい音が聞こえてきた。10人程の白衣の若いお坊さん達が元気良く行進してきた。

身延山の頂上に直行し、七面山（写真④）を探し、朝の富士をながめた。久遠寺にもどり本堂前で記念写真を撮ってもらい、次は御廟所と御草庵跡（写真⑤）へ向かう。車椅子の日元さんについて歩いていくと、小さな橋があつた。橋を渡りかけると、法主様がいきなり「川を見よ」と言われた。立ち止まって川に目をやる（写真⑥）。

丸みのある大きな石がゴロゴロとあつた。思えば、この石、この川こそ日蓮上人の当時をしのぶに一番ふさわしい場所なのだろう。法主様が若い頃、日蓮上人に呼ばれて東京から来られた時、上人をしのんで遊ばれたという川でもある。

工事中だつた御廟所は遠目に挨拶し、御草庵跡や川を見てしばらくの時を過ごした。

予定のとおり次は、富士山本宮浅間大社に参る（写真⑦）。宮司さんのお話を聞いた。その後、中西会長さんは宮司さんに大倭神宮のことを話されていた様であつた。

関東組、新幹線組とはここでお別れした。バス組は、富士山の雪解け水が湧いているという、大社内の湧玉池（写真⑧）の赤い橋を渡つて会館で昼食を頂いた。

いよいよ帰りのコースに入る。富士山はずーとすごい姿を見せてくれていた。富士宮辺りでバ

スの中からお山に帰りの挨拶をしていたら、「ワレノチカラヲ オボエテオケ」と大倭の龍王さんが声をかけてこられた。

東名高速道路は工事中で大変な渋滞で、一泊三日の旅になるかと思う程だったが、28日の内に無事、帰邑することが出来て良かった。

初参加の文化行事

群馬県安中市 桜井誓子

人の目に心に、色取り取りの鮮やかな印象で楽しませてくれた木々の紅葉も、その葉を一枚、一枚、落としていく。落葉の様子は、終わりの気配を含んだ季節への郷愁感や寂寥感を感じさせるが、落ちていく静かなリズムは、心に安らぎを与えてくれる。人はどこかに忘れてしまっているようにだが、本来、生命にとつてのリズムとは、そうした静かさなのかもしれない。色彩とリズムの静かな美しさ。木々達は生命の輪の終点において、この美しさで人の心を穏やかに暖める。人が感じる原点は大自然なのだろうという気がした。

旅行から一月が経とうとしている。皆さん、お変わりなくお過ごしでしょうか。皆さんとご一緒出来てとても楽しい二日間でした。やはり、参加して良かったと思えました。少し、あの日を振り返ってみようと思う。

雨天時の車の運転を、幾らか心配していた私の気持ちを払拭するような快晴の朝であった。十月二十七日、午前十時出発し、伯母達と母、私の四人で一路、山梨・下部を目指した。空気が澄んでいるようで、地元の妙義山の奇峰さが青く際立っていた。快調に走り抜けた長野、清里高原は、いち早く黄色いセーターを着ていた。高原の先は甲斐の国、戦国時代の武将、武田信玄公のお膝下でもある。盛者必衰、因果応報の理の如く、甲斐

の武田家も歴史の潮流に渾融されていった。時代性と武士として生きることの悲しさを思いながら、信玄公の愛した土地を遠ざかる。

そして、山を間近に下部ホテルはあった。午後二時半到着。思いの外早かったので、一番乗りかと思いきや、さすが大倭会。会長夫人、方々の笑顔が迎えてくれた。夜の宴会では、巧みな司会の元で、歌あり、踊りあり、取りは湯浅劇団の「かぐや姫」。不思議と綺麗で、どこことなく妖しい湯浅さんが印象的だった。「風林火山の間」での宴には、信玄公縁の霊人さんも一緒に楽しめたようだ。馬場姓の伯母も出し物に参加したが、その馬場も信玄公に縁があるようなので、少しでも興を添えることになって良かったと思えた。和やかに楽しい場の気とお酒を含んだことで、私の心もより上気した。とても楽しい夜であった。

明けて二十八日、朝、身延山へ向けてバスは走り出す。私達も車で、その後に従う。途中、緩やかな富士川を鑑賞しながら、身延山に到着。早速、ロープウェイに全員で乗り込む。眼下に、急勾配の身延山が姿を見せた。緑深い印象が、今でも鮮明に残っている。「ここが日蓮さんのお山なのだ」。心引かれながら、上っている途中、視界に富士山の頂きが現れ、歓声が上がった。日本人の心に宿る富士山の存在を改めて感じた。

奥之院で、日蓮さんにお参りをした。初めてお会い出来たことが嬉しかった。今では、法主様の語る日蓮さんを知ること、私にとつて、日蓮さんは近しい存在になったようだ。「我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん等と誓いし願い破るべからず」という言葉の中から、非常に深い親心というようなものを感じる。真摯に自らの大使命に向かった日蓮さんは、現代の我々にとつては、親心を感じるべき霊人である

あることを実感した。奥之院付近からの山々の景観は壮大で、秋の光に輝く晴れやかさは、まるで日蓮さんの人生のように思われた。

山を下り、少し離れたところに、かつて日蓮さんが居住されていた御草庵跡がある。そこは、周囲の原木が光を遮る為に苔むす程、陰湿な場所であったが、晩年の八年四カ月の間、生活を営まれた場所である。奥之院とは違い、日々の名残りという雰囲気があり、現界時での人間的な日蓮さんを感じるようだ。ここで、日蓮さんの生活を想われたという法主様を、今は私達が思い馳せている。そして、法主様を通して日蓮さんを想う。日蓮さん―法主様という心の継承による存在の現出をもたらした大自然の流れ、「神ながら」の見事さには、言葉もない。「いづくにて死に候とも墓をば身延の沢にせさせ候べく候」と遺言された日蓮さんの心と共に、今なお息衝く「妙法蓮華経」の道への信念を、身延の山に感じたのである。

山を去り、旅の締め括りは、富士山麓の富士山本宮浅間大社への参詣である。木花之佐久夜毘売命を御祭神とするせいか、大らかで、優しく清々しい所だという印象を受けた。こんこんと湧く水は、軟らかく、甘く感じた。拝殿での参拝時、「奈母太加天腹」と発せられた日蓮さんの声と皆での唱和は、天に届くような爽やかさだった。別れ際に交わした握手と笑顔が、温かく、心に残っている。

今回、初参加だったが、楽しみながら霊人さんと交流することが出来て、とても良い旅になった。この時代だからこそ、こうした交流が可能であつて、それは、今を生きる現界人に賦与された流れのリズムなのかもしれない。母が日蓮さんに再びの参詣を約束した為、来年も運転手になりそうです。

あじさい日誌

11月11日 大倭殖産棟に松永秀彦さんが入社、土木部に配属されました。

11月12日、12月3日 西齋庭を中心に紫陽花邑の一部下水道工事が大倭殖産棟によつてすすめられました。通行止めの日などもありましたが、事故なく無事終了しました。

11月15日 大倭神宮月次祭。

11月16、17日 杉本順一・志津女夫妻は、湯浅晴子・米澤明さんと岡山県美甘村を訪ねました。村の蛇谷の龍神さんと、天文7年頃の地で戦つて死んだ多くの尼子氏と三浦氏の武人達

の鎮魂慰霊のためとのこと。
11月21日 大倭病院前にできたマンションの住人で平賀さんという夫妻が、ピラを見てと訪ねて来られ、成羽町教育委員会製作の『備中神楽』ビデオをプレゼントしてくれました。お二人は何と美甘村出身とのこと。
11月23日 大倭大本宮月次祭。祭典後、平成6年11月23日の法話テープを聞かせてもらいました。(いずれ記事としても掲載したいと思います)

月次祭に先立ち大倭会館で、双葉館や有志の皆さんによつて今年田んぼで収穫した新米で赤飯等がふるまわれました。
11月28日 大倭病院では今年半期の決算報告等のため役員会が

開かれました。
11月30日 日系米人オノノさんが来邑。法主様の著書『ことむけやはす』をアメリカで読んで、一度、紫陽花邑に来たかったとのことでした。
夜6時30分から拝殿で成羽町保存会の皆さんによる第9回備中神楽の上演がありました。終了後、大倭会館で打ち上げ。この機会に合わせて浜松市の山田罇子さんが来邑、大倭会館に一泊されました。また邑の高橋良美さんの、福島や東京のご姉妹3人がそろつて来邑されました。妹の連れ合いの方も来られ、4人が12月2日まで。
12月1日 昇ちゃんは今年末年始、横浜の弟さん宅への帰省が

新年のご挨拶を申し上げます

人の子も吾が子と思う情こそ

いや栄えゆくくにもとなれ 「すさのお」第11号法主寸言より

地球上の子供達がこれほど大人達から見すてられた時代はありません。法主様のお心を原点にして皆さんと共に生きてゆきたいと願っています。

大倭五十九年 元旦

大倭紫陽花邑 代表 矢追 家麻呂
邑人一同

決まって、夜行バスの切符も介添えして電話で予約済み。しかし気を揉んで一人、駅に出かけ二重に予約をさせていただきました。
12月4日 前夜からの風雨も止み、午後2時から大倭神宮で金鶏祭が行われました。
12月6日 大倭神宮月次祭。
12月7日 交流の家にハンセン病療養所から社会復帰して関西で生活する3組の夫婦が来られ一泊。F I W C 定例委員会と合流、夕食を共にして歓談しました。翌日、キャンパーは大倭の大掃除の助っ人。
12月8日 雨混じりの寒い日となりましたが、紫陽花邑境内の大掃除除穢が行われました。
大倭安宿苑では
11月12日 秋の叙勲で、福田卓参与が勲四等瑞宝章を受章されました。
11月19、21日 富雄南中学2年生5名が、福祉体験学習に。
12月3、6日 春日中学校2年生23名が2日間ずつに分かれ福祉体験学習に訪れました。
(菅原園)
11月15、16日 今年最後の宿泊旅行で住苑者13名が淡路島洲本温泉方面へ行きました。
(須加宮寮)
12月6日 奈良県心身障害者作品展に37名の住苑者が出品、菰淵光さんが書道で優秀賞をもらいました。
(長曾根寮)
11月21日 伏見保育園の園児約百名の、賑やかで心温まる訪問がありました。
(八重垣園)
11月20日 俳句の会。「吊るし柿日々黒ずむとある便り」「夕映えをはね返したる紅葉かな」
12月1日 開設7周年を迎え、お祝いをしました。

あんない

* 年始祭(大倭神宮)
1月1日(祝) 午後0時半から紫陽花邑内の諸霊への挨拶。午後2時から大倭神宮の年始祭。

* 月次祭(大倭神宮)
1月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四一〇回禊会
1月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 大とんど
1月13日(成人の日) 午前10時より大本宮西の齋庭で、大とんどをしてお正月の松飾りなどを火にあげる神事です。

* 月次祭(大倭神宮)
1月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大本宮)
1月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼昔から毎年長曾根寮へ清掃奉仕で来て下さっている弁天宗の方々の中に、昭和52、53年頃の旧須加宮寮玄関前の記念写真を持つている方がおられました。若い法さんや、私の父親も写っていました。ダサイネクタイしているなあと思いつつ、久しぶりにカラーの父親の顔を見れてとても嬉しかったです。(昌)